11/28 8:45〜11:4 5

「日本の名湯百選 © 連携会議」

コーディネーター　合田純人　NPO 法人健康と温泉フォーラム常任理事

大野正人　高崎経済大学地域政策学部地域観光政策学科教授

1．日本の名湯百選 © の背景と経緯

日本の名湯百選 © は健康と温泉 FORUM 実行委員会（現在の特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム）が日本温泉療法医会と共同し、1989 年 9 月から 1992 年 9 月の 4 年間に実施した広報事業です。温泉の各分野の専門家が、温泉地を 1．遊びを中心とした温泉地 2．周辺を含めた観光を主とした温泉地 3．保養・休養を主とした温泉地 4．病気療養を主とした温泉地 5．いわゆる秘湯といわれる温泉地の 5 カテゴリーに分類し、主に 3、4 の温泉地を中心に国民の健康増進、疾病予防の保養条件、資源の適切な管理、優良な自然環境保全、さらには日本の温泉文化・伝統が伝承され、温泉が地元で大切にされているか等を実際に地元で検証しました。この地道な作業は温泉地が全国に分散されていること、公正中立な立場で特定の便宜を排除する等で時間と労力のかかる作業でしたが、結果的に当時のバブル景気に翻弄された日本の温泉地の実態を数々の社会的な背景のもとに浮かび上がらせることになりました。地域遺伝子をもった歴史ある温泉地が、変貌し、変質し、その大切な保養空間を空洞化させつつある現場に立ち会うことになったのです。当時の多くの地元関係者は一部の人たちを除いて、やがて来る、バブル景気崩壊の反動と国民の温泉地に寄せる期待の変化に、気づく余裕がありませんでした。したがって日本の名湯百選 © の目的と認知がこの時点で正しく評価されていたか疑問が残る結果となりました。一方、当時の温泉療法医や温泉医学全般の社会的な立ち位置も学会内では特定疾患の治療など専門化し、広く国民の視線上に健康増進基地として温泉地のありかたを提言できる立場ではありませんでした。この両面の事実を背景にして、日本の名湯百選 © は予想外の困難な事業となりましたが、逆に温泉地で地道に活動する人たちや先人の教えを改めて学び温泉地のあり方に一定の方向性を確信した貴重な研究となりました。4 年間の継続的現地調査を完了し、最終的に、温泉療法医の推薦のあった全国の温泉地から「温泉療法医がすすめる健康と保養の温泉地」として広く国民に発表することができました。特に専門家の意見のみの書類選定に終わることなく、地元温泉療法医や自治体などの取材とともに一般利用者や地元市民の生活視線を重視し、特定の旅館や施設ではなく、保養滞在空間として温泉地を評価した極めて評価の高い事業となりました。認定温泉地を行政区間を超えて、温泉郷とした場合もあり、実際は 89 箇所の温泉地認定となりました。

2．日本の名湯百選 © シンポジウム

その後、バブル崩壊後、日本の温泉地が健康志向を打ち出し、全国の温泉地から他薦、自薦含め多くの問い合わせがあり、又マスコミや各界から 100 箇所の認定を要請されてきました。この間約 25 年間には温泉地やそれを取り巻く社会的環境が大きく変貌したことが実感できます。特に東日本大震災やそれに続く原発事故で国民の多くの人たちが、自然の脅威を実感し生命観や生き方を見直す傾向が顕著になってきました。原発事故は引き続き国民の不安の種となり、これからの社会のあり方に大きな課題となりますが、同時に自然の慈悲としての温泉と温泉地にも大きな課題を提供しています。自然と寄り添って生きてきた日本人がもう一度温泉地に帰ってきて、生命再生装置としての温泉地を体感し、そして元気になって日本を支えていただければと思います。２０１１年 10 月震災・原発事故に喘ぐ福島県いわき市で復興支援事業を行い、そして同時にフォーラム 25 周年記念事業として 23 年ぶりに新たに 11 箇所温泉地が認定され、名実ともに日本の名湯百選 © となりました。2012 年秋、北陸の山中温泉で開催した第一回シンポでは、昨今の温泉地を取り巻く環境は厳しく、本物の温泉が選別され、生き残っていくべく、各温泉地では様々な取り組みが報告されました。匠と自然と、温泉文化が正しく伝承されているとする選定基準の日本の名湯百選 © の温泉地では、まさに名湯百選の認定の意味とその価値を広く一般利用者や市民に告知し、改めて、地域の温泉文化資源を自ら見直すよい機会となりました。毎年開催される日本の名湯百選 © シンポジウムを契機に、日本の名湯百選 © の温泉地の広域連携を深め、温泉地の特徴や地域固有の歴史・文化遺産を浮き立たせ、あるものは相互に補完し、またあるものは個性ある地域活性化と街づくりに温泉を活用する共通の方策を検討し、その試みと成果を広く地域住民と共有しさらには、全国の温泉利用客に啓蒙普及していくことができれば、20 数年の時代を超えて、長い歴史を持つ日本の温泉の伝統が生き返り、引き続き国民の信頼と期待に応える日本の名湯百選 © でありたいと念じます。第 1 回の山中温泉でのシンポジウムに続き、第 2 回の本シンポジウムが関係諸氏の真摯な討議の場となり、実りある会議となりますよう皆様のご支援ご協力を賜りますよう宜しくお願い致します。

第 1 回日本の名湯百選 © シンポジウム

2012 年 9 月 26 日・27 日石川県加賀市山中温泉山中座

第 1 回シンポジウム参加温泉地：山中温泉、指宿温泉、鹿教湯温泉、肘折温泉、村杉温泉、榊原温泉、あわら温泉、湯原温泉、寸又峡温泉、作並温泉、関金温泉、玉川温泉、菊池温泉、増富温泉、いわき湯本温泉（１５温泉地）

日本の名湯百選©リストはhttp://www.onsen-forum.jpをご覧下さい。

© The Forum on Thermalism in Japan 2013

design and printing: ryoondo-tea

鹿教湯温泉 五台橋　氷灯ろう 夢祈願

第２回日本の名湯百選 © シンポジウム 2013

「地域資源としての温泉の可能性―健康・福祉・介護と観光交流」

2013年 11月27日(水) 11月28日(木)

長野県上田市鹿教湯温泉　鹿教湯三才山リハビリテーションセンター鹿教湯病院講堂

[主催]　NPO法人健康と温泉フォーラム　日本の名湯百選©シンポジウム鹿教湯実行委員会（上田市　上田市商工会　丸子観光協会　丸子温泉開発㈱　鹿教湯温泉観光協会　鹿教湯温泉旅館組合　鹿教湯商工会　厚生連鹿教湯病院）

[後援]　日本健康開発財団　日本温泉気候物理医学会　日本温泉療法医会　地域活性学会　全国市長会　全国町村会　長野県　長野県温泉協会　信濃毎日新聞社　長野大学　鹿教湯温泉健康保養協会　鹿教湯温泉保養受入協議会

[協賛]　信州銘醸（株）メルシャン㈱

11月27日(水) シンポジウムと交流会

14:00−17:30 シンポジウム
「地域資源としての温泉の可能性ー健康・福祉・介護と観光交流」

開会セレモニー（14:00〜14:10）
①基調講演（14:10〜14:40）
　飯島裕一（信濃毎日新聞編集委員）
②パネルディスカッション（14:45〜16:50）
　コーディネーター
　飯島裕一（信濃毎日新聞編集委員）
　パネラー
　石川理夫（日本温泉地域学会会長）
　熊谷　晃（長野県観光部信州ブランド推進室長）
　伊沢　真（鹿教湯病院院長）
③特別講演（17:00〜17:30）
　「農村交流と観光 〜 日本農業賞を受賞して」
　小林一郎（農業生産法人・株式会社信州せいしゅん村　むらおさ）
参加温泉地宿泊券他抽選会

18:30−20:30　交流会（夕食会）（会場：鹿教湯温泉交流センター）

11月28日(木) 参加温泉地代表報告と現地視察

8:30−　8:45 トレーナーによる健康体操
8:45−11:45「日本の名湯百選©連携会議」(会場：鹿教湯病院講堂)
　コーディネーター
　合田純人（ＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム常任理事）
　大野正人（高崎経済大学地域政策学部地域観光政策学科教授）
第３回シンポジウム開催地（熊本県菊池温泉）代表挨拶
閉会式

12:00−14:15　現地視察　観郷ウォーク・昼食会

信州 鹿教湯 かけゆ温泉

11/27 14:00〜17:30

シンポジウム
「地域資源としての温泉の可能性 ー健康・福祉・介護と観光交流」

■歓迎挨拶

母袋創一
長野県上田市長

第 2 回日本の名湯百選©シンポジウムが、大勢の皆様のご参加をいただき盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。また、全国各地の有名温泉地の皆様、そして温泉関係者の皆様、ようこそ信州上田市鹿教湯温泉にお越しくださいました。心から歓迎申し上げます。

さて、鹿教湯温泉は約 1200 年前には開湯していたといわれ、更には鹿に姿を変えた文殊菩薩が、信仰心の厚い猟師に温泉の場所を教えたという開湯伝説が残る由緒ある温泉地であります。

また、その優れた泉質から古くより湯治場としても親しまれ、その後の厚生連鹿教湯病院が設置されたことも相俟って、温泉とリハビリ、健康の里として親しまれてまいりました。しかしながら、現在は時代の変化とニーズの多様性など様々な要因から他の温泉地と同様に厳しい状況が続いております。

こうした中、全国各地から様々な取組を展開されております名湯百選のお仲間をお迎えして「地域資源としての温泉の可能性」をテーマにシンポジウムが開催されますことは、大変有意義であり、温泉地が抱える諸課題の解決に向け、新たな一歩を踏み出すことができればと大いに期待するところであります。
今回のシンポジウムを契機として温泉地間の連携がより一層図られるとともに、それぞれの温泉地の活性化に向けた取組が力強く推進されることを願うものです。

結びに、本シンポジウムの開催に当たり御尽力をいただいた関係各位に敬意を表するとともに、御参加いただいた皆様の御健勝と各々の温泉地の更なる発展を祈念申し上げ、歓迎の御挨拶とさせていただきます。

斎藤宗武
鹿教湯温泉観光協会会長

「日本の名湯百選©シンポジウム」が、日頃より温泉の活性化に取り組んでいる全国の皆様と共にこの鹿教湯温泉で開催できましたこと深く感謝申し上げます。

鹿教湯温泉は文殊菩薩が鹿に化身し、猟師の一人にその存在を教えたのがはじまりと伝えられています。昭和の経済発展で各地の温泉地が歓楽化していくなか、鹿教湯温泉はかたくなに保養・療養の場にこだわり、一貫して健康開発型の温泉地として開発を進めてまいりました。「リハビリテーションセンター」「健康の里」「21 番名所めぐり」「クアハウス」「ヘルスケアトレーナー」「朝の健康体操」「1 週間の県内集団保養」など、健康開発型の温泉地づくりを意識した事業を策定し、実行してきました。その努力が実を結び、現在でも療養・健康づくりの場として多くの人が訪れる温泉地に発展しました。
このシンポジウムを機とした相互の交流と絆が、日本全国の温泉地の活性化に寄与することを祈念するとともに、関係各位のご尽力に深く感謝し、あいさつといたします。

■基調講演
「生活の中で温泉を生かし楽しむ」

飯島裕一
信濃毎日新聞編集委員

私は 30 年近く、長野県を中心に発行しています信濃毎日新聞で、医学・医療・健康問題の報道を担当しています。が、ここ 15 年少々、日本内外の「温泉の医学、「温泉と健康」にこだわりを持って取材を続けています。
まずは医学担当の私が、なぜ「温泉」に関心を抱くようになり、こだわり続けているのかーを、お話しさせていただきます。その中に、温泉が健康に対して持っている今日的な意味、そして現代社会の中で温泉を生かし楽しむ意義があると思うからです。さらに、欧州の温泉健康保養地について述べさせていただきます。そこに、日本における「現代型湯治」のヒントがあるからです。一方、入浴による事故が多いのも現実です。安全入浴のために、留意したい点にも触れさせていただきたく存じます。

■パネルデスカッション
「地域資源として温泉の可能性―健康・福祉・介護と観光交流」
コーディネーター　飯島裕一　信濃毎日新聞編集委員

パネラー
石川理夫
日本温泉地域学会会長

温泉は国民的資産であり、優れて地域資源としての多様な側面、資産価値を持つ。温泉を語る場合、そこには二つの原点があることを想起したい。一つは、地上に湧き出た源泉そのもの。もう一つは、湧出した源泉をその地域の人々が大切に守り育て利用する中で形成された温泉地の存在である。温泉にかかわる人は＜温泉地あっての自分たち＞ということをとかく忘れがちだが、訪れる客は湯やおもてなしだけでなく、温泉地全体のありようによって深く安らぎ、癒されるのである。いま温泉地全体のことを共同で考え、活性化に取り組む所は元気を保ち、個々の宿や施設、温泉街の活力につながっている。温泉地活性化には、自分たちの温泉の持ち味・個性と、温泉地の歴史・文化、景観、たたずまいを見つめ直すこと。国民保養温泉地とは本来＜ニッポンの温泉地＞ブランドたる十分な要件を備えており、鹿教湯温泉を「名湯」たらしめた経過の検証とともに、共に再評価して内外にアピールすべき時である。

パネラー
熊谷　晃
長野県観光部信州ブランド推進室長

近年「地域のブランド化」が注目されている。ブランドとは、そもそもそれのみで存在するものではなく、顧客の心の中で識別、信頼され、憧れやかけがえのないものとして認識された時に初めて形成されるものである。それ故に、今後も地域間競争が益々激化する中、これからの「地域のブランド化」に向けた方向性としては、これまでの一方的に異空間を演出しようとする「観光地づくり」ではなく、そこに住む人も訪れる人も互いにその「地域らしさ」を形成する背景（＝風土やライフスタイル）を理解し、楽しみ、共に新たな価値や魅力を生み出していく、すなわち人と人との「関係地づくり」への取組みが求められる。一方で、温泉には、現代社会の合理性や効率性追求型の医療やライフスタイルを修正する力を持っているように思える。健康長寿県長野こそ、まずは温泉地の人々が温泉ライフを楽しみ、広く発信し、多くの人々とその価値を語り合うこと、そして、温泉自体の価値をその本質的価値（医学的効用など）と関連する価値（風土やくらし、周辺地域との関係など）の両面から磨き上げることの双方によって力強い「温泉地のブランド化」が図られる可能性がある。

パネラー
伊沢　真
鹿教湯温泉病院院長

その昔から鹿教湯温泉は脳卒中・中風に効果のある湯で知られていました。昭和 31 年、農業協同組合（現 JA）が、この地の利を活かし脳卒中のリハビリを専門とする鹿教湯温泉療養所（23 床）を開設しました。高度成長期時代を背景にその後、増床を繰り返し、昭和４８年には本院、付属研究所病院（その後分院）を合わせ５４０床となりました。平成１２年の介護保険元年までは、全国各地からリハビリを希望する患者さんを受け入れてきました。しかし、H12 年以後、患者さんの流れが変わり、現在、入院患者さんは地元並びに隣接する地域圏からがほとんどになっております。病棟は、リハビリの回復期病棟を中心に運用をしております。H19 年度には同じ厚生連傘下で近隣の三才山病院と同一事業所となり、鹿教湯三才山リハビリセンターの名称のもと共同して経営をしております。H２２年度には分院を介護型老健に転換、かつ上田市内に移転し１２０床で運営。また、地域医療の展開として１診療所、訪問リハビリ、訪問看護も行っています。また、５４年の歴史を有する集団保養は時代の流れで今では少なくなりましたが鋭意努力し継続をしております。

■特別講演
「農村交流と観光―日本農業賞を受賞して」

小林一郎
株式会社信州せいしゅん村むらおさ

長野県上田市武石地域（旧武石村）で活動を始めて 13 年、信州せいしゅん村の活動は新聞やテレビで数多く取上げられ、その活動は遠く海外にも及んでいます。
農村地域である武石はごく普通の農村ですが、「ほっとステイ」と称して近隣宿泊施設と連携して年間 8,000 人ほどの人々を農村体験として受け入れています。(県下 8 地区で 20,000 人の受入)
この活動は「ありのままの農村の生活や文化」を体験してもらう交流体験として広く認知され、無理して作った体験を提供するものと違い、その日の普通の暮らしを一緒に過ごして貰う体験ですから長続きします。受入農家も訪れる皆様も喜びと感動がお互いにあり、その笑顔は、活き活きとして清々しく、感動の涙もあります。
生まれ育った地域を見直し、地域愛をもって地域活性化を図る信州せいしゅん村を手本とすれば、皆さんの地域をもう一度見直すきっかけとなり、地域の可能性も感じると思います。

PROFILE 講師・パネラー プロフィール

飯島裕一　いいじま　ゆういち
信濃毎日新聞編集委員。日本科学技術ジャーナリスト会議理事。1948 年長野県上田市生まれ。北海道大学水産学部卒業。信濃毎日新聞社入社後、報道部、整理部、文化部を経て、1994 年から現職。専門は、医学・医療・健康問題。
著書・編著書に「健康不安社会を生きる」「健康ブームを問う」「疲労とつきあう」（岩波新書）、「温泉の医学」（講談社現代新書）、「温泉で健康になる」（岩波アクティブ新書）、「お年寄りにありがちな病気の話」（厚生科学研究所）、「脳　小宇宙への旅」（紀伊國屋書店）など。

石川理夫　いしかわ　みちお
温泉評論家・プランナー。仙台市出身。日本温泉地域学会会長。環境省中央環境審議会温泉小委員会専門委員。企画編集事務所主宰の傍ら、国内外の温泉地を訪ねて温泉評論活動ならびに温泉地の活性化に携わり、温泉文化史や惣湯をはじめとする共同湯研究にも取り組んでいる。温泉に関する著書や論文多数。主な著書に『温泉法則』、『温泉巡礼』、『温泉で、なぜ人は気持ちよくなるのか』などがある。

熊谷　晃　くまがい　あきら
長野県観光部信州ブランド推進室長
慶應義塾大学法学部法律学科卒業。1984 年から長野県職員。1991 〜 1993 年経済企画庁（現内閣府）調査局海外調査課へ出向（欧州班長）。その後、長野県庁総務部秘書課、財政課、国際課、上小地方事務所商工課、農政部農業政策課に所属。2009 年には衛生部病院事業局において県立 5 病院の地方独立行政法人化に着手。2010 年地方独立行政法人長野県立病院機構本部事務局次長兼経営企画課長、2011 年同次長兼財務課長を経て、2012 年から現職。

伊沢　真　いざわ　まこと
昭和 54 年、山形大学医学部卒業、同年信州大学第三内科入局
昭和 58 年鹿教湯病院に就職。健康管理部長、リハビリ部長、地域医療部長、分院長、老健施設長を経て平成 25 年から鹿教湯病院長に就任。
健康管理部長時代には集団健康保養の検診等に携わる。

小林　一郎　こばやし　いちろう
11951 年 1 月生まれ。平成 12 年 2 月「信州せいしゅん村」立ち上げ、21 年 1 月農業法人化。23 年に「ＪＴＢ交流文化賞」と「オーライ！ニッポン大賞」。25 年に「日本農業賞」を受賞。21 年には国の農商工連携事業認定、25 年に国の 6 次産業化事業認定を受ける。